

日本語の中間態再考

——「インテルはいつてる」を中心に——

劉 劍

キーワード：態、中間態、能動態、自発態

要 旨

中右 (1991) は「この肉は苦もなく切れる」のような受動的な可能表現に当たるものを中間態、『ニュース・ウィーク』の最新号はよく売れている』のような表現は自発態であるとしている。本稿は動作主と受動者という態の観点から、「売れる」文は自発態ではなく、もう一つの種類の中間態であると主張する。考察は「インテルはいつてる」のような対象を主語にとる「はいる」文を中心に展開し、この種類の中間態が能動態や自発態とどう違うかを明らかにした。

1. はじめに

1.1 中間態とは

文構造の構成成分の中で、最も重要な部分を形成するものとして態 (ヴォイス) がある。「態」については、『言語学大辞典』は、以下のように解釈している。

態は、印欧語の動詞の文法範疇の一つであり、英語などでは、能動態と受動態の区別として表されている。これは、動詞の表す動作と、その動作を起こす者 (動作主 agent)、および、その動作を受ける者 (受動者 patient) との関わり合いを示すもので、その動作を起こす者が主語となる場合は、その動詞は能動態の形をとり、その動作を受ける者が主語となる場合は、その動詞は受動態の形をとる。たとえば、英語で Jack hit Paul. の hit は能動形 (active form)、Paul was hit by Jack. の was hit は受動形 (passive form) である。

『言語学大辞典』p. 865

態 (ヴォイス) の中で、中間態というのがある。中間態というのは、中右 (1991)

によると、そもそも形式は能動態であるのに、意味は受動態である、という意味で携わっている。たとえば、英語の以下のような例があげられる。

- (1) The meat cuts easily.
- (2) The book reads easily.

形式上では能動的にみえる(cutsはpassive formではなく、active formである)ものの、意味上では肉が動作主として何かを切るわけではなく、肉が誰か意識的な動作主によって切られるという意味にしか読みとれないので、主語のmeatはagentではなく、patientであることがわかる。したがって、意味的にいうと、例文(1)(2)は受動態である。

1.2 先行研究および再分析

伝統的な日本語文法研究において、中間態という用語が用いられているのは稀である。中右(1991)では「寺村が…中間態にあたるものを「受動的可能表現」と名付ける…」とされている。そして中右自身も、「中間態は可能態の一種だ」と主張している。英語についてしばしば指摘されるのは、中間態は主語の永続的属性を記述するものであるということである。中右(1991)はその永続的属性とは結局、能力のことであると指摘している。

たとえば、

- (3) この肉は苦もなく切れる。

それに対して、以下の例文は自発態であると指摘している。

- (4) 『ニュース・ウィーク』の最新号はよく売れている。

(3)の中間態の「切れる」は「テイル」形を受け入れない。「*この肉は簡単にかみ切れている」は非文法的ではあるものの、(4)の「売れる」は「テイル」形が受け入れられると中右(1991)が指摘している。さらに、意味役割に関して、中右(1991)は「売れる」について以下のように説明している、「売買行為は所有権の譲渡を意味するので、それに付随して物体の移動も含意するからである」。それにまた、例文(4)の「売れる」は「主語の実体は自動的動作主として機能する能力

を備えている。それと裏腹に、「外部動作主の含意は必ずしもない」という。このところでは、筆者は中右（1991）と異なる立場に立つ。形式上では、「切れる」は「テイル」形を受け入れず、「売れる」は「テイル」形を受け入れるという差異があるのは確かではあるものの、意味上では、「売れる」は「主語の実体は自動的な動作主として機能する能力を備えている」や「それと裏腹に、外部動作主の含意は必ずしもない」というところでは、異見を持つ。理由としては、以下の通りである。

外部動作主が存在しないと、売買行為さえ成り立たない。売買行為には必ず人間が意志的に参与する行為である。また、雲や流れ星などの自然物は、それ自身動作主として移動する能力を備えているが、『ニュース・ヴィーク』という物体はそれと違って、それ自身の力で移動する能力は備えていない。必ずだれか人間の売買行為によって、所有権の移動が実現される。物体それ自身が移動できないし、物体の所有権の移動も外部動作主の売買行為によってはじめて実現するということから、「売れる」というのは『ニュース・ヴィーク』自体に備える能力ではなく、それと裏腹に必ず外部動作主が含意すると判断する。

中右（1991）が指摘した「自発態」はむしろ、外部動作主が「存在しない」（含意しない）ではなく、存在はしているものの、「売ろうとする」という努力はしていない、なので、『ニュース・ヴィーク』がある意味では、自然と買い求められて、結局売れたという意味であるのであろう。その売れ行きは売る人の努力した結果でもなく、売る人がコントロールしていることでもないという意味では、「自然と売れた」とは理解してもいいが、しかし、それは本当に「自発態」であるのであろうか。「売ろうとする」努力や売れ行きへのコントロールはないものの、売買行為には、売る人と買う人がそれぞれ存在する。売ると買うもそれぞれ意志的な行為である。この意味では「売れる」には「外部動作主」（売買行為をする人）が存在する。本稿では、「動作主の努力はない」と「動作主の存在はない」とは別々の問題として取り扱う。態の判断は意味上の外部動作主が存在するかどうかを基準とし、外部動作主の努力があるかどうかを基準としない。この立場に立って、外部動作主が存在しない（雲や流れ星の移動など人間のコントロールと完全に関係ない事象）と自発態であり、外部動作主が存在さえすれば受動態であると規定する。したがって、「売れる」をはじめ、「動作主は存在しているものの、その動作主は努力していない」事象を、意味上では受動態でありながら、形式上は能動的な形をとるため、中間態とみなし、前に述べた「動作主の存在は完全がない」事象を自発態とみなすことにする。

1.3本稿の目的

本論文は、中右(1991)が指摘した「受動的可能表現」以外にも、日本語には中間態が存在することを主張する。具体的には『『ニュース・ウィーク』の最新号がよく売れている』や「インテルはいつてる」のような構文である。『『ニュース・ウィーク』の最新号がよく売れている』については1, 2節で、先行研究の問題点として指摘したが、以下では「インテルはいつてる」を例にとり、本稿の目的を詳しく説明する。商品広告のPR用語として「インテルはいつてる」という表現が有名である。日本語母語話者の耳にしたら、少しも違和感を覚えないが、しかしよく考えてみると、「インテルはいつてる」の中の「はいる」は、「すし屋にはいる」や「お風呂にはいる」のような能動文の中の「はいる」とは違うことがわかる。「すし屋にはいりたい」とか「お風呂にはいりたい」とかの「たい」との共起は能動文では極自然な表現であるのに対し、「*インテルが(パソコンに)はいりたい」は許容度は非常に低い。また、「太郎よ、すし屋にはいれ!」「太郎よ、お風呂にはいれ!」という命令文は言うのに対し、「*インテルよ、パソコンにはいれ!」という命令文は成り立たない。以上は構文上の差異であるが、意味から考えると、「すし屋にはいる」や「お風呂にはいる」のような能動文では、主語がそれ自身の力で、「はいる」という行為を行うが、それに対し、「インテル」がそれ自身「はいる」能力を備えていないと思われる。確かに日本語の「はいる」は「外から中へ」という位置変化を重んじる動詞であり、「誰の力によって、どのように」位置変化したかは前景化していない。したがって、位置変化さえあれば「入る」は成り立ち、「インテル」それ自身が位置変化する能力を備えているかどうか、位置変化を引き起こしたのは何なのかを問わなくてもいいように見える。しかし、同じ位置変化を表すものが、なぜ以上述べたような構文上の差異をみせるのか。「態」という動作主(agent)か受動者(patient)かの意味役割の観点を用いると、その差異が説明できると思われる。つまり、インテルはパソコンにはいつて、そして、パソコンにあるという状態に達したのは、「インテル」みずからの力によって引き起こされたわけではなく、むしろメーカーなど、誰かによって「いれられた」のであろう。要するに、形式からみると、「はいる」という能動的な自動詞を使っているものの、意味からみると、やはり「いれられた」という受動的な意味である。主語インテルの意味役割はこの文ではagentではなく、patientであるため、「たい」や命令文などと共起しないのは当然であろう。

『『ニュース・ウィーク』の最新号はよく売れている』はある程度可能表現と無関係とは言えないが、「インテルはいつてる」という文は主語のインテルの永続的

属性や能力などとは見えないので、受動的可能表現ではないと判断する。したがって、日本語には受動的可能表現以外に、もう一つの種類の中間態があると主張する。

本論文の目的は「インテルはいつてる」のような構文は自動詞構文ではあるが、通常自動詞構文とみられる能動態構文や自発態構文と違って、中間態構文であると主張することである。したがって、「インテルはいつてる」のような構文と能動態構文や自発態構文との相違点を明らかにしなければならない。論の展開としては、まず第2節では「はいる」という動詞を中心に、コーパスで「インテルはいつてる」と同じように、中間態的な意味を含む構文の実際用例を調べ、その用例から特徴となる要素を取り出し、検討してみたい。第3節では能動態（「すし屋にはいる」）との比較を通して、形式的には受身形などを使っていないため、能動的に見えるものの、意味的には受動的であることを明らかにする。第4節では自発態（「バターが溶ける」）と比較して、意味的には自発態とつながっているところがあるが、やはり自発的な変化ではないことを明らかにする。第5節では「はいる」以外の動詞へ広がって考察し、第6節では論をまとめる。

2. 用例の検討

2.1 用例採取

まず「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて、「(対象物) がはいつて (い) る」の実際の用例を調べた。検索語は「が入る」「がはいる」「が入り」「がはいり」「が入って」「がはいつて」である。調査に当たったところ、「すし屋にはいる」のような主語コントロールできる事象などを除いて、「(対象物) がはいる」「(対象物) がはいつて (い) る」となっていると解釈可能な例を採取した。以下のようなものがあげられる。以下、原文のまま引用する。

- (5) この財布には3千円入っています。
- (6) 自分のジーンズのポケットにもなにかはいつているのに気づきました。
- (7) スキムミルクの中には乳糖がはいつているんじゃないでしょうか。
- (8) 煮干しや干し椎茸、ときにはさけの頭もはいつていました。
- (9) そのとき私の手には、すでに東和銀行支店から盗んだ一千万円の大金がはいつていたのです。
- (10) 時計用のボタン電池がはいつていますよ。
- (11) モミガラの中に、真っ赤なりんごがいつぱい入っています。

- (12) 封筒の中にはソ連のミサイル配置図が入っていた。
- (13) 洗濯機を開けたら脱水済みの洗濯物が入っていたりします。
- (14) 風船の中には綿毛の種が入っていますね。

2. 2用例から抽出される特徴

- ア) 意味からいうと、(5) の3千円にしても(10) のボタン電池にしても、上の例のいずれにしても、人為的動作を前提としている。誰かが3千円を財布に入れたという動作が前提としなければ、3千円が自ら財布に入るわけにはいかないからである。つまり、主語である対象物は述語が記述した(位置)変化にはコントロール能力を持っていない。
- イ) 対象物の位置変化(場所移動)という事柄を示さない。確かに連体修飾語として「タ形」で出てくる用例、たとえば、「今夜は、紺に白い縞のはいったスーツを着ていた」はあった。しかし、言い切り文としては、いずれも「入っている(ます)」と「入っていた(ました)」という形式となっており、「ル形」と「タ形」は観察されなかった。つまり「ル形」と「タ形」で表す位置変化の局面を重視する表現ではなく、「テイル形」による状態化した表現となる。
- ウ) ほとんどの用例には場所「ニ」格や場所に当たる名詞句などを伴っている。文全体の意味は「ある場所の中に対象物がある」という単なる存在の意味に近い。
- エ) 前に述べた人為的な動作を前提としているものの、「対象物のある場所に入れる」人、つまり動作主は明示されていない。「わざと」などのような「人為的参与」という意味を表す副詞との共起も観察されなかった。

3. 能動態との比較

3.1 主語コントロール

「すし屋にはいる」とか「お風呂にはいる」とかの能動文において、「はいる」という動詞はむしろ動作動詞に近い。主語が「はいる」という位置変化をコントロールできると判断できる。たとえば「すし屋にはいれ!」という命令文、「すし屋にはいろう」という勧誘文、「すし屋に入ろうとする」という意志を表す文、「すし屋にはいりたい」という願望を表す文などは成り立つ。「(何か原因があって) わざとすし屋にはいった」という文も文法的である。言い換えると、「人為的動作」の

意味を含む副詞「わざと」との共起も受け入れられる。

しかしそれに対し、「*インテルよ（パソコンに）はいれ！」「*3千円よ、財布にははいれ！」「*ボタン電池よ、（時計に）はいれ！」などは非文法的である。これらの構文における「はいる」という位置変化は主語がコントロールできないと判断される。勧誘文「*インテル、はいるう」や、意志を表す文「*インテルが（パソコンに）はいるうとする」や、願望を表す文「*インテルが（パソコンに）入りたい」なども許容度が非常に低い。

3. 2アスペクト形式

コーパス調査では、「すし屋にはいる」や「お風呂にはいる」のような意識的な動作を表す「はいる」は、「ル形」と「タ形」で出てくるのが多いという傾向がみられる。たとえば、

- (15) 「あなたのためにドア開けてんのよ。どうするの？入るの？」
- (16) 日下くんは、右折して、広沢池の南を通り、狭い道に入る。
- (17) ゆるやかな坂を五十メートルほど行くと、小内家の敷地に入った。
- (18) 天海は言い訳のように口にして穴の中に入った。

変化を「状態1から、状態2になること」と規定すれば（奥津（2007：89）を参照）、以上の例文における「はいる」の「ル形」と「タ形」はいずれも変化の意味が取れる。状態1は外の位置にいる状態であり、状態2は中の位置にいる状態であるが、「はいる」は外から中へという位置変化を表す変化動詞であると思われる。「はいる、はいった」という形は要するに「変化」の局面が重視されている。

それに対し、「インテルはいつてる」のような構文では、「はいる」という動詞は「ル形」と「タ形」で出てきにくく、ほとんどの用例は「テイル形」であった。「テイル形」によって状態化した表現となったので、位置変化の意味、言い換えると「変化」の局面が読み取れず、「単なる存在」の意味に近い。たとえば「この財布には3千円入っています」という例文を「この財布には3千円があります」と言い換えても、意味はほとんど変わらない。要するに「状態」の局面が重視されている。「3千円が入った」という「位置変化」の局面には無関心であるといってもよい（もし実際にこの局面を重視する用例が存在するとすれば、「はいる」や「はいった」という変化はだれか（外部動作主）に引き起こされた変化で、受動的な変化であると想定できる）。この点においては前に述べた位置変化という変化の局面を明示し

ている (15) ~ (18) の各例文とは異なっている。

それと反対に、コーパス調査によって、「すし屋にはいる」や「お風呂にはいる」のような意識的な動作を表す「はいる」は、「テイル形」で出てくるのが少ない傾向にあることがわかった。

まとめてみると、能動態の「はいる」は「ル形」や「タ形」で出てくるのが多く、「テイル形」で出てくるのが少ない傾向がある。それに対し、中間態の「はいる」はほとんどが「テイル形」で出てきて、「ル形」や「タ形」で出てくるのが連体修飾語のみであり、言い切りの文ではほとんど見つからなかった。したがって、能動態の「はいる」は (位置) 変化という局面を前景化し、中間態の「はいる」は単なる状態の局面を前景化している傾向にあるといえる。

4. 自発態との比較

自発態という用語は日本語研究で常用されているものであるが、ものが外部からの力によってではなく、自らの力で何らかの変化を経たという意味を表すヴォイスである。自発態のマーカ―として「(ら) れる」があげられるが、中右 (1991) によると、以下のような例も自発態である。

(19) a. The butter melted.

b. そのバターは溶けた。

「(ら) れる」の形を取っていないものの、意味上は、「自らの力によって変化した」という特徴があるので、自発態とされている。同論文で、英語研究の中に「自発態」という用語にあたるものを探し当てることができないが、実質にあたるものがないわけではない。英語の能格 (非対格動詞) とされているものが、だいたい自発態に対応していると指摘している。この点では、本論文は中右 (1991) の主張に従う。つまり、日本語では外界の力に頼らず、自ら発生した変化を記述した自動詞文を自発態とし、英語では非対格動詞がそれに対応していると見なす。

以下では、本論文の中心となる「中間態」文は「自発態」文といかに異なるかについて考察を行うことにする。

4.1 主語責任

同じ「はいる」を例にしても、「自発態」が観察される。たとえば「十月にはい

った」のような例文である。しかし、「十月にはいった」のは何？ということとはなかなか答えられない。言い換えると、「十月にはいった」という文の主語は不明瞭であり、省略されたと見なしても、補填できないため、文法的には説明できないところが残っている。したがって、本節では「はいる」という動詞を例にしないようにする。前に述べた中右(1991)があげた「そのバターが溶けた」の「溶ける」及び他のいくつか典型的な自発態自動詞(非対格動詞)を例にし、考察を展開したいと思う。たとえば、

- (20) 湖が凍った。
- (21) タオルが乾いた。
- (22) ロープが切れた。
- (23) コップが割れた。
- (24) バターが溶けた。

(20)～(24)はすべて自発態と解釈可能である。外的な力によってではなく、主語それ自身の力で、述語が記述した変化を経たと解釈できるのである。(20)を例にして、主語の「湖」が述語の「凍る」の能力を備えており、「凍る」という変化に責任(responsability)を持っている。3.1節で述べた「主語が動作や変化をコントロールことができる」ことと若干違っている。(20)の主語「湖」は意識的にコントロールはできない。ただ、「凍る」は湖の自発的な変化であり、湖が「凍る」という変化の担い手であるため、「凍る」という変化に責任を持っていることは言うまでもないことである。

それに対し、中間態の「インテルはいつてる」「財布に3千円がはいっています」などは、自発的な変化ではない。「インテル」が自動的に(パソコンに)はいるわけでもないし、「インテル」が自らの力で(パソコンに)はいる能力も持たない。この「はいる」という変化をもたらしたのは「インテル」それ自身ではなく、必ず外部動作主でなければならない。「はいる」という変化に責任を持っているのは、主語「インテル」や「3千円」ではなく、外部動作主でなければならない。以上の点においては、中間態は自発態と異なっている。つまり、自発態構文の主語が述語の変化の責任者であるのに対し、中間態構文の主語が述語の変化の責任者ではない。

4.2 アスペクト形式

前に述べたように、コーパス調査では、対象を主語に取る「入る」は「テイル形」

の用例しか見つからなかったが、「溶ける、乾く、切れる、割れる」などの動詞は「テイル形」の用例もあるし、「ル形、タ形」の用例も数少ない。それで「凍る、乾く、切れる、割れる、溶ける」などの動詞は変化そのものの意味もとれるし、（変化した後の）結果状態の意味もとれるということが分かる。それに対し、対象を主語に取る「入る」は「テイル形」によって、状態化した表現の意味しかとれない傾向があるといえる。

中右（1991）が指摘したように、「この肉はよく切れる」のような受動的な可能を表す中間態は「テイル形」を受け入れない。しかし、本稿で考察した中間態は、傾向として、よく「テイル形」を伴っている。「テイル形」を伴っているがゆえ、本稿で考察した中間態を「状態化した中間態」と名付けても良いのであろう。

5. 広がり

対象を主語に取る「入る」の延長線には、中間態が構成できる動詞「植わる、建つ、決まる、売れる、茹だる、炒まる、煮える…」などがあげられる。以下では「植わる」と「建つ」を例にして考察を加える。

5.1 「植わる」

例えば「植わる」を例にする。同コーパスで、「植わる」について調査を行ったが、結果は以下ようになる。

検索形態：「植わ」

総検索数：26例

うち「植わった+n（5例）；植わる+n（2例）；植わっている+n（4例）」（つまり連体修飾語）は11例であり、本稿では扱わないようにする。

残りの15例はすべて「ている」形を取るものである。具体的な例は以下の通りである。

- (25) 両方の家とも、大きな木が植わっていて、素晴らしい家だったんですが。
- (26) むかしはこの街道ぞいにも柳の並木が植わってました。
- (27) 築山があり、低く枝を伸ばした形のいい松が植わっていた。
- (28) 現状が良くわかりませんが、大きな木が植わっているとすると、それを切っ
て根っこを起こすのが大変そうですね。

- (29) 外には昔から残っている梅の木が植わっています。
- (30) 次にいいと思うのは、外に梅の木や竹が植わっていて、梅の香りや竹の葉ずれの音がする。
- (31) お宅の庭園にも、一本の桜が植わっていた。
- (32) さらに、その向こうには梅の木が植わっていました。
- (33) そして、この部屋の前に一株の梅が植わっていて—
- (34) 庭もそうとうひろく、流行りのガーデニングというのか、小さな樹木と達夫の知らない奇妙な植物が密集して植わっていた。
- (35) 南側だろうと思うのですが、東側には竹が植わっている。
- (36) 塀のかわりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。
- (37) 若しこんな指が福寿草のように小さな鉢に植わって居たら、どんなに可愛らしいだろう。
- (38) 井戸端にひよろ高いいちじくの木、厠の汲み取り口に南天が二、三本植わっているほか、目ぼしい草も樹木もなく、もっぱら洗濯物の干し場に使われている。
- (39) 築山には人の背丈より高い屏風石が見事に配置され、クロマツ、モチノキ、モッコク、カエデ、ウメなど、きれいに整枝された木々が植わっている。

以上の15例の「植わる」文における主語はすべて木や竹などの植物である。植物は意志や意識を持っていないので、以上の15例の「植わる」文は能動態構文ではないと判断される。

また、以上の15例では、「自ら、おのずから」などの自発を表す副詞と共起するものは一例も見つからなかった。データの不十分性を見直すため、その補完としてアンケート調査を行った。アンケート調査では、「木が自ら植わっている」や「木がおのずから植わっている」という文の許容度が低いということがわかった。山に自然に生えている木について、「植わっている」とはいえないと母語話者は語感で判断している。したがって、「植わる」文は自発態構文でもないと判断される。

能動態でもないし、自発態でもないという二点においては、「植わる」という動詞は対象を主語にとる「入る」とは同じである。

5.2 「建つ」

「建つ」についての調査結果は、「入る、植わる」と違ったところがある。「植わる」や対象を主語に取る「入る」は「テイル形」の用例しか見られなかったが、「建つ」の用例は、「テイル形」とともに、「ル形」と「タ形」の用例やそれ以外の用例も若干存在し、以下ようになる。

表1.

形態	建つ (建つて、建ち)	建った	建っている (ていた)	建っていく
用例数	48	30	498	6
比率	8.2%	5.2%	85.6%	1.0%

比率からみると、「テイル形」を取る用例は85%以上を占めるので、傾向としては、前に考察した「植わる」や対象を主語に取る「入る」と同じように、状態の意味が取れるのが多いと言える。しかし、「ル形」と「タ形」の用例が見られたがゆえ、変化それ自身の意味もとれると分かる。具体的な例をいくつか挙げる。

- (40) 世帯住宅が建つてすぐに離婚。もう1軒は建つて間もなく若夫婦が出てきました。
- (41) 寒い一室に住んでいるときに豪邸がどんどん建つ。
- (42) 受け付け用のテントは十人の男たちの手で、ほんの十五分で建つた。
- (43) 家は買った人がすぐに壊して建売住宅が数軒建つたと聞いた。

「植わる」や対象を主語にとる「入る」は「テイル形」しか取れないのに対し、「建つ」や「決まる」などの動詞は、数少ないが、変化の局面を重視する「ル形」「タ形」が取れる。それはなぜかということを今後の課題にする。

それとともに、「決まる」には「木田さんとの結婚が決まると、…」のような「ル形」の用例、「月形さんは、あくまでお父さまの代役だよ」武彦の、その一言で決まった。」のような「タ形」の用例もよく耳にする。したがって、「決まる」も「建つ」と同じように、変化の局面を重視する「ル形」「タ形」も取れるし、状態の局面を重視する「テイル形」も取れるということがわかる。それについても今後の課題にする。

6. 終りに

自動詞を非能格動詞と非対格動詞という二種類に分けるという非対格性仮説があり、有意義な仮説として広く認められた。他の言語における非対格動詞に関する先行研究によると、非能格動詞は主語の意識的な動作を表し、非対格動詞は主語の無意識的な変化を表すことがわかった。前者はだいたい能動態にあたるものであり、後者はcome spontaneously without a volitional agentという意味特徴をもって、だいたい自発態にあたる。

しかし、日本語の状況を見ると能動態の非能格動詞と自発態の非対格動詞以外に、もう一つの種類の自動詞があると観察される。それは中間態動詞である。

項構造からみると、「すし屋にはいる」の「はいる」は非能格動詞であり、その唯一項（文に出てこない主語）は外項である。「バターが溶けた」の「溶ける」は非対格動詞であり、その唯一項（主語の「バター」）は内項である。「インテルはいつてる」の「はいる」は、その唯一項「インテル」も内項であることはたしかである。そういう意味では、非対格動詞と同じような振舞いを示す。

しかし、態（ヴォイス）の観点からみると、非能格動詞の「はいる」（すし屋にはいる）は能動態であり、非対格動詞の「溶ける」は自発態であるが、対象を主語に取る「はいる」（インテルはいつてる）は能動態でもなく、自発態でもない。むしろ非能格動詞と非対格動詞以外に、日本語には、もう一つの種類の自動詞がある可能性があるという考えが浮かびあがる。少なくとも、態（ヴォイス）という観点から、日本語の非対格動詞をさらに詳しく点検する必要があると思う。

本論文は対象を主語にとる「はいる」をはじめ、「植わる、建つ、決まる」などの動詞を態（ヴォイス）という観点から考察し、対象を主語にとる「はいる」類動詞文は能動態の非能格動詞構文および自発態の非対格動詞構文との意味と統語的な違いを明らかにした。中間態自動詞の存在を確認したところでは、本論文は有意義である。

参考文献

- 奥津敬一郎(2007)『連体即連用ー日本語の基本構造と諸相ー』くろしお出版
- 影山太郎(1996)『動詞意味論ー言語と認知の接点ー』くろしお出版
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典』第6巻「術語編」
- 岸本秀樹(2000)「非対格性再考」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』、
71-110 ひつじ書房
- 中右 実(1991)「中間態と自発態」『日本語学』10-2: 52-64
- 仁田義雄(1991)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 宮腰幸一(2008)「テイル文の意味的分析ー動詞分類と事象構造の精密化へ向けてー」『論叢 現代語・現代文化』筑波大学 人文社会科学研究所
現代語・現代文化専攻
- Levin & Rappaport (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*[M], Cambridge, Mass.:MIT Press.
- Perlmutter, D (1978) *Impersonal passive and the unaccusative hypothesis*. Proceedings of the Fourth Annual Meeting of Berkeley Linguistic society, 157-189. Berkeley, University of California

リュウ ケン/人文社会科学研究所
(2010年10月30日受理)